

# 歴史的現実の世界における生命の自己形成

— 歴史的生命の世界における哲学的実践 —

黒田昭信

最後期西田哲学は一つの生命の哲学として考えることができる。「形」という概念によって開かれた展望の中で、私たちがそこに生き、それを生きている世界は自己形成的な形の世界として捉えられ、その世界が生命の世界にほかならない。西田における最も重要かつ生産的な概念の一つ、「行為的直観」がこの展望の中に導入されることによって、自己形成的な形の世界 — その最も根本的な次元が歴史的生命の世界である — の分節化の過程が解析可能になる。西田哲学の最も根本的な概念の一つである「自覚」は、西田第二の主著『自覚における著間と反省』(1917)以来、その哲学的探求過程を通じて精練されていくが、それが私たちに歴史的生命の世界において哲学的実践がなされる次元を捉えることを可能にする。

以下において、まず最後期西田哲学の生命の哲学の本質的な部分を手短に提示してから、行為的直観概念から引き出すことができるいくつかの論理的帰結を明らかにし、その上で、行為的直観と自覚との間にある還元不可能な差異を明確にすることによって、歴史的生命の世界において厳密な意味で哲学的実践を構成するものを見極める。

## 1 — 生命の哲学

最後期の西田の生命の哲学は、「論理と生命」(1936)から「生命」(1945)にかけて展開・発展させられていくが、J・S・ホルデーンの有機体論を基礎に構想されている。その生理学的理論によって開かれた展望においては、生命は、環境から独立した、それ自体で存在する実体ではなく、反対に、有機体とその環境との相互作用が働く媒介的な場所において、言い換えれば、その場所の分節化から結果する特定の諸関係が維持される領域において、把握されなければならない。この相互作用と特定の諸関係は、「世界が世界自身を形成する作用<sup>1)</sup>」と西田が呼ぶものに対応する。

西田はまた、ホルデーンの「生命とは空間的な境界をもたない特異な全体として自らを表現している自然である」というテーゼを援用する。生命に空間的な境界がないということは、生命体は、内的環境と外的環境との交換を、代謝活動を通じて行い、その結果として、生命活動は生物個体の物理的限界の内側に閉じ込めることはできないということを意味する。生命は、種的な構造とその環境との間の諸関係のうちにある。これらの諸関係が生命機能を構成し、それらは各種に固有の形の下に表現される。

---

<sup>1</sup> NKZ VIII 288.



行為的直観の本質的な規定を五点にまとめて提示しよう。

(一) 「行為的直観の世界は、無限の世界である。行為的直観とは無限の過程でなければならぬ<sup>4</sup>。」行為的直観は私たちの行為する身体においてたえず始まり続ける、つねに始まりとして働き続ける始まりである。それは世界においてそこに諸事物をそれとして現出させる世界の自己否定作用としてつねに現実的に作用している。本質的内在化作用として、行為的直観は、その能動性と受動性の両契機によって、諸事物の私たち行為する身体にとって無関係な外在性を否定し、諸事物をそれら自身の十全な形において自らに現れさせる。行為的直観は、世界に帰属する私たちの行為する身体によって担われているゆえに、世界の只中であって世界自身の自己否定作用として現実化されるが、それゆえにこそ世界において諸事物がまさにあるがままの諸事物として現れる。この行為的直観が、「現実が、自己自身の中から自己自身を超え自己自身を構成し行く、自己構成の過程<sup>5</sup>」をもたらすのである。

(二) 行為的直観は主体にも対象にも従属しない。むしろ行為的直観によって開かれる世界において主体と対象とがそれとして分節化される。行為的直観によって直接把握された諸事物は、世界のうちに行為的直観の形そのものを描き出す。諸事物は行為的直観がそこにおいて現実化される構成形態を表現している。行為的直観の領野においては、何らかの主体との関係における外部と内部との区別を前提として導入することはできない。この区別は行為的直観においてもたらされる原初的経験についての反省的抽象化の手続きによってのみ獲得されるものである。

(三) 行為的直観はその根本において世界の原初的出来事である。行為的直観がまさにとりして現実に行われるその初源の次元においては、つまりそれに対して事後的なすべての認識が定義上排除されるその最初の契機においては、ただ世界の一つの経験があるだけである。世界のあらゆる認識の起源にある行為的直観は、意識に対して与えられるのでもなく、意識の権能の支配下におかれているのでもなく、それ自身からしか、その固有の本質からしか説明されえないものである。発生的順序にしたがって言えば、行為的直観が世界の統一化契機としての時間性とその差異化の契機としての空間性を発生させるということから意識の生成が説明されるのである。

(四) 行為的直観は知覚世界に帰属しない。まったく逆に、知覚が行為的直観の世界の一部をなす。行為的直観は歴史的世界のまさに原初的経験であり、それが世界の認識と自己の認識を可能にする。この経験は世界がその内部そのものに自己を否定する要素を生むということからなっている。この世界の自己否定が行為的直観として現実に行われ、その起動点は私たちの行為する身体にある。世界の、世界における出来事として、行為的直観は「世界の自己否定の肯定として現れ来るものたるに過ぎない<sup>6</sup>」。

(五) 行為的直観は「極めて現実的な知識の立場を云うのである。すべての経験的知識の基となるものを云うのである<sup>7</sup>。」しかしながら、「行為的直観そのままが知識だと云うのではない<sup>8</sup>。」行為的直観はあらゆる認識のいわゆる出発点でもなければ、その直接の基礎なのでもない。つまり、行為的直観は、現在の認識が展開されるにしたがって、その現在の到達点から離れてしまうような出発点ではない。認識の展開を通じて、行為的直観はつねに世界の直接把握として働いているのである。それはまた何らかの理論がそこから構成される認識の基礎でもない。最初の

<sup>4</sup> NKZ X 530.

<sup>5</sup> NKZ VIII 565.

<sup>6</sup> *Ibid.* 傍点は引用者による。

<sup>7</sup> *Ibid.*, 541. 傍点は引用者による。

<sup>8</sup> *Ibid.*, 564.

自明性の直接経験として、行為的直観は、そこから推論が推し進められるような仮説的命題を自らに与える作用にけっして還元されるものではない。

## 2. 2 行為的直観の原基的次元

ある種に固有な諸行動は、原基的次元における行為的直観を構成する。この意味での行為的直観には諸動物たちの種的行動もすべて含まれる。

ある種に固有の行動がその種に固有の環境の中で生ずるとき、この行動はその主体が見出される環境そのものの中に諸事物の形態、西田が「形」と呼ぶものらのある配置を描き出す。このことが意味するのは、世界のある構成形態はこの行動そのものによって直接に現実化されているのであり、この行動が、それが実行される環境にとってもその行動の主体にとっても現実的な、諸々の形のある配置を現出させているということである。生きた身体がそれ固有の環境においてある一定の仕方で行動するという事は、その生きた行動の主体によって環境がその環境として限定されるということと同時に、その主体もその主体として自らがそこにおいて行動する環境によって限定されているということの意味している。そこにおいて、環境を構成する諸事物の認知が身体的行為によって直接的に形として表現されているとき、行為的直観が実行されているということができし、その逆も言うことができる。この次元においては、主体と環境との関係の変化の可能性を認めることは、両者によって保たれている事物の諸形態の配置が変化を蒙ることがありうるかぎりにおいて正当と見なせるが、創造の契機をそこに導入することはできない。なぜなら、この次元では、主体はその環境にも自己自身にも、所与に対して新しい構成形態を自ら作り出すことはできないからである。この次元での行為的直観において現実化されているのは、主体と環境との形態的相互限定である。

## 2. 3 人間存在の自己形成作用としての行為的直観

厳密な意味での行為的直観、つまり高次の行為的直観は、歴史的実在の世界あるいは歴史的生命の世界の中で人間存在によって現実化される。行為的直観は歴史的世界において形が形自身を自ら限定するという事からなる。それはこの世界の「歴史的身体」によってこの世界において現実化される。それゆえもはやそこでは主体と環境との相互限定的な関係、つまり本質的に連続性、反復性、画一性によって特徴づけられる二項関係が問題なのではない。人間存在による行為的直観は、世界が自らの内部そのもので、諸々の形のある構成形態を自らに与えることからなる。この動的で創造的な構成形態の知覚的中心が私たちの行為する身体にほかならない。「形が形自身を限定することが、行為的直観と云うことである<sup>9</sup>。」つまり世界が私たち行為する身体によって自己自身を限定し、自己自身を形作り、その行為する身体も含めたすべての自己構成要素に〈形を与える〉ことが行為的直観にほかならない。

人間存在による行為的直観は、世界の諸事物の配置あるいはその構成形態の創造の起源に、世界の世界自身についての新しい認識ならびに世界の新しい自己形成作用の産出の起源にある。世界のこれらの諸配置あるいは構成形態は私たち歴史的身体を構成員とする共同体によってそれと認知され、共有され、保存されうるが、と同時に、それらは一つの歴史的身体によって否定され、破棄され、変容させられることもありうる。自己形成的な歴史的実在の世界における行為的直観の起動点として、人間存在はこれらの諸配置あるいは構成形態との関係において、それらの只

<sup>9</sup> NKZ X 519.

中であって、自らを常にある一定の形に自己限定する。人間存在による行為的直観によってこそ、世界は自らを理解し、自らを表現し、その内部そのものにおいて、自らに形を、つまり諸々の構成形態を与える。

西田において、生物の世界とはただ「作られたもの」からなる世界であり、ある限定された諸形態の無際限の繰り返しにとどまり、そこには創造性が見出されない世界である。それに対して、人間存在がそれとして生きる歴史的現実の世界は、生物の世界とは異なって、「作られたものから作るものへ<sup>10</sup>」と展開する。私たちの行為する身体は作られたものであると同時に作るものであるから、まさに私たちの身体においてこの作られたものから作るものへの転回、反復から創造への転回がこの世界の只中に到来するのである。歴史的生命の世界では、作られたものは作るものを産出するために作られている。いわば被造物は創造者が被造物の只中に生れるように作られているのである。

「行為的直観とはポイエーシスの自己の過程である<sup>11</sup>。」この定義が示しているのは、ポイエーシスの自己は、歴史的な身体として、歴史的現実の世界の只中で行為的直観を実行するということである。一つの歴史的な身体として具体化されている私たちの行為的自己は、世界の自己形成の起動点として、自らを取り巻く諸々の形との関係において限定されたある形に自らを限定しながら、世界の構成形態を創造する。それゆえこの世界における行為的直観に先立つ独立で自律的な自己の存在は排除される。私たちのポイエーシスの自己は、私たちの歴史的な身体がいま、ここにおいて歴史的現実の世界の中でそれぞれ個別的な仕方でも自己限定するという意味において、かけがえのない事実である。私たちの歴史的な身体それぞれのこのかけがえのなさが私たちのポイエーシスの自己の創造性の起源にある。しかしながら、ポイエーシスの自己は時間空間の中で限定された身体的自己においてのみ具体化されるまさにそのことゆえに、私たちの自己における作られたものから作るものへの展開は必然的ではなく、しばしば危険に晒される。私たちの自己の脆弱さは私たちの歴史的な身体が会うこの不確実性あるいは困難に由来する。

### 3 — 自覚と行為的直観との区別と関係

西田哲学の最後期における自覚と行為的直観との区別と関係を検討していこう。

#### 3. 1 歴史的実在の世界において行為的直観によって直接把握可能になる自覚

自覚は歴史的な世界が自らの内部で自己限定し、自己形成し、自己表現するというに由来する。自覚は根本的に世界に属することがらであり、世界が自らに与えるものである。しかし、これらすべてのことが十全な仕方でも現実化するのには、私たちの個別的な自己のそれぞれにおいてであり、その個別的な自己の自覚は、「かかる世界の自己自身を限定する唯一的事実として成立するのである<sup>12</sup>」。

<sup>10</sup>

西田は「作られたもの」を「単に与えられたもの」からはっきりと区別する。後者は世界の外部にとどまる〈与えるもの〉を前提とするのに対して、前者は世界の内部そのものにおいて作られる。

<sup>11</sup> NKZ X 556.

<sup>12</sup> NKZ X 512.

世界が自覚する時、我々の自己が自覚する。我々の自己が自覚する時、世界が自覚する。我々の自覚的自己の一々は、世界の配景的一中心である<sup>13</sup>。

世界の自覚は、それが私たちの自己において経験されることによって、私たちに世界を直接経験することを、つまり世界の直観を可能にする。この直観は、

すべての点が世界の始となる、時間的・空間的、空間的・時間的世界の自己限定として、見るものと見られるものとの矛盾的自己同一的に、形が形自身を限定する、形が形自身を見ると云うことである<sup>14</sup>。

この直観はまさに西田が行為的直観と呼ぶものであり、歴史的な身体としての私たちの行為的身体によって現実化されるものである。自覚は、行為的直観がそれを歴史的事実の世界における私たちの行為的身体に直接把握可能なものにするかぎりにおいて、行為的直観に同一化される。

### 3. 2 自覚と行為的直観との方法論的差異

行為的直観と自覚とは、両者それぞれの経験を可能にする関係性の違いによって相互に区別される。行為的直観は私たちの自己の世界に対する原初的關係を示すのに対して、自覚は世界の自己自身に対する根本的關係を示す。

私の行為的直観と云うのは、我々の自己が、世界を映すことによって働き、働くことによって映すと云うことに外ならない。矛盾的自己同一的世界に於ての自己と世界との関係である。自覚と云うのは、矛盾的自己同一的世界が自己の内に自己を映すと云うことである。世界が世界自身に対する関係である<sup>15</sup>。

私たちの自己が世界を映すということは、逆に私たちの自己が世界の行動する一つの観点であることを意味している。行為的直観は、世界が世界自身を自らその内部そのものにおいて私たちの自己に対して現れさせるということからなる。私たちの自己はそこにおいて世界を構成する諸々の形を受容者でありかつ贈与者である。

行為的直観の事実は、私たちの自己に、私たちの自己が持つ世界に対する関係とは区別されるべきもう一つの原因があることを開示する。それはその事实在私たちの自己において世界の世界自身に対する関係として把握されるときである。

我々の自己の自覚と云うのは、自己が何処までも世界を映す、自己が全世界を表現する、自己が世界となるという立場に於て成立するのである<sup>16</sup>。

自らの内部に自己自身を映す世界として私たちの自己がそれ自身によって把握される経験の構造ここで問題になっている。西田は、私たちの自己において、その自己によって内的に経験されるこの二つの関係性の区別に基づいて、諸科学の基礎としての行為的直観と哲学的営為である自覚との区別を確立する。

科学と云うのは、[...]

我々が現実的に、歴史的な身体的に、即ち行為的直観的に、自己自身を形成する形を見ると云う

---

<sup>13</sup> *Ibid.*, 559.

<sup>14</sup> *Ibid.*, 562.

<sup>15</sup> *Ibid.*, 470.

<sup>16</sup> NKZ X 471.

に基づく<sup>17</sup>。

世界を構成する諸々の形は、私たちの歴史的な身体において現実化される行為的直観によって、そのような諸々の形として私たちに現れる。私たちの自己は、一つの種としてまた身体的に限定された存在として世界に属しつつ、世界に対する個物として、この種的に限定された次元を超えていくことができる。行為的直観はこの内在と超越の間の弁証法的関係からなる。私たちの自己はかくして世界を一なるものとして映しつつ、その内部において世界に対立し、世界をある記号的面に映し、記号によって表現することができるようになる。ここに科学の立場が成立するための可能性の条件がある。

哲学と云うのは、之に反し世界が自己の内に自己を映すという立場に於て成立するのである。世界自身の自覚である。[…]

世界が自己の内に自己を記号的表現面的に、即ち概念的に表現する。哲学とは、かかる世界の概念的自覚ということができる<sup>18</sup>。

哲学とは、私たちの個別的自己の個人的自覚ではなく、私たちの有限の自己において経験され、その自己によって概念を通じて表現された、世界そのものの自覚なのである。

以上から、哲学と科学との立場の違いを、そして両者の関係を明確化することができる。科学は行為的直観による私たちの自己と世界との相互的な関係であるのに対して、哲学は世界の自覚によって、つまり世界の自己の自己に対する関係の直接把握によって始まる。科学は行為的直観によって原初的に与えられた私たちの自己の世界に対する関係を対象化することによって表現するのに対して、哲学は世界の自覚を表現する私たちの自己によって自らに開示された世界自身の自己表現である。

西田が哲学的知識と科学的知識との区別あるいは両者の方法論上の区別を規定しようとするとき、自覚と行為的直観との差異はより厳密な仕方では提示されるが、それは「ポイエーシスの自己」と「創造的自己」との区別に基づいた立論の中で為されている。

科学的知識は我々のポイエーシスの自己の行為的直観に基づいて成立するのであるが、ポイエーシスの自己の自覚の根柢には、創造的自己の自覚がなければならない。創造的世界の個物として、我々の自己はポイエーシスなのである。何処までも自己自身を限定する絶対的事実としての、我々の創造的自己の自覚に基づいて哲学的知識が成立する<sup>19</sup>。

科学的知識は私たちのポイエーシスの自己がその焦点あるいは起点である行為的直観の現実性に基づいて成立する。行為的直観が私たちに与える原初的な確実性の経験が科学的知識の起源にある。しかし、行為的直観は、自己形成的世界の直接把握として、相互に自己限定的で表現的な諸々の形の只中で現実化されており、それらの形に働きかけ、それらに変更あるいは変容をもたらすことを私たちの自己に可能にし、世界に別の配置あるいは構成形態を与えることを可能にする。かくして、行為的直観は私たちの自己それぞれを世界の創造的行為の焦点あるいは起点にしるのである。この世界の創造的行為は世界の創造性のある時ある所で実現、具体化する。しかしながら、行為的直観は世界の諸構成形態の認識の根柢においてつねに作動しているとはいえ、それ自体は世界の創造性そのものの直接的認識ではない。行為的直観は、その起源へと自らを向け返るとき、世界の創造性の原初的根源的認識へと私たちを導く。この方向において、私たちのポ

<sup>17</sup> Ibid.

<sup>18</sup> Ibid. 傍点は引用者による。

<sup>19</sup> Ibid., 561.

イエーシスの自己は、自らをそのようなものを把握することを介して、創造的自己の自覚へと、「否定的自覚」の働きによって、自らを深化させていく。この過程を自ら歩むことそのことが方途という意味での哲学の方法にほかならない<sup>20</sup>。

### 3. 3 創造的自己とポイエーシスの自己との関係

創造的自己は世界の始まりから始まり、たえず始まる〈始源〉である<sup>21</sup>。ポイエーシスの自己はそれに対して世界の現実的な構成形態の只中であって具体化された一つの始まり、一つの起動点である。世界が無限の多様性の相の下に自己限定するとき、ポイエーシスの自己は世界において行為的直観によって時間空間的に限定された一知覚的中心として経験される。世界が永遠の唯一性の相の下に経験される時、創造的自己は世界の只中でそれとして自覚される。私たちの行為する身体において具体化されたポイエーシスの自己は、創造的自己ではない。前者は後者を表現する。無限の創造的自己は、私たちの有限の自己において、歴史的生命の世界の絶対的自己否定を介して、自らを表現する。創造的自己は、世界のノエシスの自己限定として自らに自らを現れさせる。それに対して、ポイエーシスの自己は、世界のノエマ的自己限定の中で、自らの周りに構成される世界との関係において自らにそれとして現れる。

## 結論

行為的直観が実存的な実践であり、そこにおいて生命の本質が歴史的現実の世界の中で自己形成的な形として顕れることだとすれば、哲学は形而上学的な実践であり、そこにおいて、またそれによって、諸現象の外的な現れが方法的に括弧に入れられ、現象世界において無数の対象という形をとって自ら自己限定する創造的な無へ、すなわち〈生命〉の源泉そのものへと立ち返ることである。

---

<sup>20</sup> 西田によれば、真実在たる〈生命〉に至るための根本的な哲学的方法は「懐疑による自覚」(NKZ XI 151)である。西田はデカルト的な懐疑を「徹底的な否定的分析」(ibid.)と見なすことによってそれを懐疑による自覚とみなす。「私は哲学の方法を否定的自覚、自覚的分析と考えるものである。」(ibid., 152)

<sup>21</sup> Michel HENRY, *Généalogie de la psychanalyse*, Paris, PUF, 1985, p. 123 ; 山形頼洋他訳、ミッシェル・アンリ『精神分析の系譜 失われた始源』、法政大学出版局、一九九三年、一五四頁参照。